

あびこの文化

発行人 大野 美崎
 我孫子市 高野山
 250-23
 04(7182)
 0861

令和六年度総会の開催

今年も昨年に続き一堂に会しての総会を開催しますので是非ご参加ください。

総会終了後に「美手連」が企画し当会が参加した豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業で完成したデジタル教材「手賀沼に集った文化人」と他1作品を映像披露します。

日時 6月23日(日) 14時～16時
 場所 我孫子市民プラザ会議室1
 会次第 総会議事

デジタル教材披露

「手賀沼に集った文化人」
 (我孫子の文化を守る会)
 「手賀沼むかしものがたり」
 (流山市立博物館友の会)

当会が作成した「デジタル教材「手賀沼に集った文化人」の原本は今まで当会が研究・勉強してきた有形・無形の「我孫子ゆかりの偉人」に関するデータが基になっている。取り上げた6人は我孫子に住んだなど特に我孫子に関係が深い文化人であるが、敢えてタイトルを「手賀沼に集った」と変えたのは、我孫子市だけでなく柏市、印西市など手賀沼周辺の小中学校に関心を持って貰い、教材として採用されることを期待したものである。

今回のデジタル教材作成については対象が小中学生ということもあり、従来の大人向けの説明とは異なるためいくつかの工夫が必要であった。ひとつは作品の長さである。小学生がひとつのテーマ作品の映像を飽きずに観る時間は7分から10分と言われているため、大人向けに作ったシナリオを大幅にカット・短縮した。

二つ目は、言葉の表現であり、小学生でも分かる言い回しに変えた。三つ目は使用漢字である。難解な漢字をやめ、さらに逐一「ルビ」をふり、小学校低学年にも理解できるように対応した。(左は「手賀沼に集った文化人」の画面の一部)



①(考察)前号でも若干触れたがデジタル教材について改めて考察してみたい。デジタル教材とは

デジタル教材とは、スマートフォンやタブレット端末、ノートパソコンなどのデジタル機器によって作成・利用される教材のこと。デジタル教材の導入により、紙媒体での教材では困難だった情報の追加や削除、編集が容易になった。また、インターネットへの接続も可能となるため、より多面的な教材の運用が期待されている。

デジタル教材と似たものとして、デジタル教科書があるが、教育の分野では「教材」と「教科書」は明確に分類されている。文部科学省(文部科学大臣)の検定に合格したものが「教科書」で、教科書の総称は「教科用図書」である。

教材と教科書

教科書における学習の補佐や副読本として用いられるものが「教材」である。教材は教科書と違い、文部科学省の検定に合格していないため、「検定外教科書」に該当する。また、小・中・高等・特別支援学校において、この教材のみで授業を行うことはない。教材によっては、取り扱っている教材の内容や記述様式が教科書に酷似している場合もあるが、あくまでも教材は教科書による学習をサポートするためのものである。

デジタル教材のメリットについて

①一人ひとりのレベルに合わせた学習ができる
 デジタル教材では、子どもたちのレベルに合わせた学習を展開できる。デジタル教材では音声の読み上げや文字の拡大機能があるため、例えば学習障害や視覚障害を抱えた子どもたちにも、内容を伝えやすくなる。これらは、従来の紙媒体での教材では実現することが困難だったが、デジタル教材により実現が容易になる。

②音声やアニメーションで理解が深まる

デジタル教材では、音声やアニメーションによって理解を深めることができる。従来の文字や絵、図のみの教材ではなく、音声やアニメーションによる動きを交えることで、聴覚・視覚を活用した学習が可能である。この機能により、子どもたちの教科に対する興味や関心を刺激し、より理解を深められる。

③学習意欲が高まる

デジタル教材の導入によって、子どもたちの学習意欲が高められる。従来の教材では、一方的な情報伝達型の授業が主流だったが、デジタル教材の導入によって子どもたちがより主体的に学習できる「ディープラーニング」へと転換しやすくなる。文部科学省が定めた「新学習指導要領」では、デジタル教材をきっかけに、子どもたちが自発的にコミュニケーションを取りながら、授業を展開していくことを推奨している。

④児童・生徒の荷物を軽量化できる

デジタル教材の導入に合わせて、教材のペーパーレス化が促進されることも期待されている。小学校低学年の通学時の平均重量(ランドセルとサブバッグの合計重量は、約7〜8kgといわれており、低学年の子どものためにとって、体の負担が大きいが指摘されている。いるが、教材のペーパーレス化により、子どもたちの荷物を軽量化することで負担を軽減できる。

⑤デジタル時代への適応ができる

デジタル教材の導入は、今日の情報化社会・デジタル時代(早期に適応できるように。タブレット端末などを操作する機会を増やし、今の時代に早く適応するための訓練を教育現場で実践できる。また、インターネットを活用し、自ら必要な情報を自発的に取得するスキルを習得することも可能となる。

⑥教員の負担が減る

デジタル教材の導入によって、教員の負担軽減も期待されている。従来の紙媒体での教材では、子どもたちに教材を新たに提示する場合、教員自らが手作業で作成していた。教材資料の作成は、教員全体の業務の中でも大きな負担となっていたが、デジタル教材では資料の追加や編集が容易なため、教材資料作成の負担を軽減できると考えられる。

デジタル教材のデメリットについて

(一)まで、デジタル教材のメリットについて紹介してきたが、デジタル教材の導入はメリットばかりではなく、デメリットも存在する。ここからはデジタル教材導入に伴うデメリットについても述べたい。

①画面に集中しすぎてしまう

デジタル教材の導入によって、子どもたちの興味・関心が、教科内容ではなくタブレット端末の機能性に移行してしまう可能性がある。デジタル教材は、音声機能やアニメーション機能などの活用によって子どもたちの興味・関心を刺激する効果があるが、これらの機能

がかえって過度な画面への集中を引き起こしてしまいう可能性がある。デジタル教材で活用するタブレット端末などは、あくまで学習をサポートするものであることを教員や子どもたちが共通して認識しておく必要がある。

②視力低下を誘因する可能性がある

近い位置で画面を長時間見続けていると、目が疲れたと感じやすく、視力の低下を誘引する可能性がある。デジタル教材を活用する場合は、適宜休憩を挟みつつ、正しい姿勢で画面から一定間隔をもって使用する必要がある。

③保護者もインターネットに対する適切な知識が必要になる

デジタル教材を利用する場合は、インターネットを適切に利用する知識が必要になる。これにより多くの情報を自発的に収集できることは、デジタル教材のメリットの一つである。しかし、誤った情報や不適切な情報もインターネット上には混ざっているため子どもがインターネットを使用する際には、アクセス制限やフィルタリング機能を付けるなどの対策が大切である。子どもが安心してインターネットを使用できるように、子どもだけでなく保護者もインターネットに対する適切な知識が必要になる。タブレット端末などにアクセス制限をかけるといった工夫も必要である。

まとめ

デジタル教科書・教材の導入にはメリットが多く見受けられるが、懸念、課題がないわけではない。まず、多くのデジタル学習がそうであるように、指導する側の理解や、生徒の能力格差が懸念されている。学習の仕組みへの理解が早く、能動的に学習できる生徒に対しては、大いにプラスに働く可能性を感じさせるアクティブラーニング、ディープラーニングだが、受動的になりがちな生徒に対してどのように学習を促すかは、教師、生徒両方にとって大きな課題となる。導入事例の

共有や、教師側のスキルを高める仕組み作りも各地で検討されていると聞く。

また、導入するにあたり端末配備や通信環境などいかに導入環境を整えられるかが鍵になってくる。

(注)全国の公立小中高校のインターネット通信環境について、規模に見合った通信速度を確保できていない学校が8割近くに上ることが4月24日、文部科学省の調査で分かった。児童生徒数が多い学校ほど通信環境が脆弱(せいじやく)な傾向にあることも判明。授業のデジタル化が加速する中、学習活動に支障が出る可能性もあるため、同省は学校側に改善を求めた。

デジタル教科書・教材は生徒の主體的な学習意欲を推進し、より深い学びに繋がる可能性のある教材である。導入に向けて指導者側の理解や活用方法、学校全体で共通のスキームをいかに作っていくかがポイントとなる。

(参考資料)

「学習者用デジタル教科書について」(文部科学省)インターネットなど

美手連総会の開催

日時 6月8日(土) 13時〜16時30分

場所 手賀沼親水広場「水の館」3階研修室

議案審議

第1号議案 2023年度活動報告

第2号議案 2023年度収支決算報告

第3号議案 会計監査報告

第4号議案 2024年度活動計画

第5号議案 2024年度予算案

2024年度役員改選

休憩

2023年度デジタル教材作品発表会開始 挨拶

4作品発表(15分×4=1時間)

休憩

4作品発表(15分×4=1時間)

閉会

美しい手賀沼を愛する市民の連合会
 ・略称(美手連)の活動に参加して(第9報)

牧田 宏恭(会長)
 ひろゆき

会報「あびこの文化」に連載の本報告は、前第198号(本年3月1日発行)に続いて、今号が9回目となる。前号の主な報告内容を振り返ると・・・

- ①「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」の進捗状況の報告
 - ②「手賀沼の水の水質調査」について
 - ③「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善にその進捗について報告を取り上げた。
- 今号では、それらを含めその後の活動内容を紹介させていたたく。なお、これらの案件は先般(2024年4月13日・土曜日開催の「美手連 理事会・運営委員会 合同会議(加盟19団体)」にて取り上げられた。なお、当会から美崎会長(美手連・理事)ならびに私・牧田(美手連・運営委員)が出席した。

1. 美手連19各団体の活動報告(本年1月以降)

当会からの報告の主な内容報告(美崎会長)は以下の通り

- ① 12月7日(日)放談くらぶ「柳宗悦と兼子」二人の個性は「こゝろもど」迄も活きねばなりません」竹下賢治氏
 - ② 1月14日(日)会報107号、3月10日(日)(会報第198号)発行
 - ③ 1月14日(日)、3月10日(日)役員会開催
 - ④ 2月24日(土)放談くらぶ「稲村雑談」我孫子の文化を守る会へ「稲村隆氏
 - ⑤ 3月21日(木)デジタル教材「手賀沼」に集った文化人」作成終了
 - ⑥ 3月25日(月)第141回史跡文学散歩「布佐の桜と新田次郎の足跡を訪ねる」
- そのほかの団体主な報告
- ① 我孫子消費者の会:2月3、4日消費生活展、そのパネル展示4〜8月実施他

② 我孫子の景観を育てる会:我孫子のいろいろ八景歩き(景観推進室との協働)について実施計画等

③ 我孫子野鳥を守る会:定例野鳥探鳥会、柏ビレッジ野鳥探査会、銚子・波崎・葛西臨海公園探鳥会実施等

④ NPO法人亀成川を愛する会:冬鳥調査、新春生き物監察会とホンアカガエル卵塊探し、印西市との協働事業「市民参加で護別所緑地の谷津の生態系事業」等

⑤ NPO法人せつげんの街:我孫子市消費生活展、「蝶絶体験」アサギマダラ成長記」実施等

⑥ 岡発戸・都部の谷津を愛する会:小学校観察会、谷津散歩の会、「ナガエ」調査、二ホンアマガエル産卵調査等

⑦ 大堀川の水辺をきれいにする会:川掃除(1,2,3月に約20数名〜70数名参加)、花壇整備等

⑧ 流山市立博物館友の会:「東葛の樹木事典」4月発行、等

その他、「手賀沼水生物研究会:外来魚情報交換会実施」や「船戸の森の会:ドングリの見分方」等の報告が行なわれた。いずれも興味をそそる話題が多い。

2. 「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」について

昨年度に続いて進められているこの事業について、昨年度の制作目的や内容の概要は紹介済の通り、次のテーマにて継続中ではほぼ完成された。現在これらの「学校現場」や「図書館」などでの公開・活用方法・活用にあたっての問題点の検討が進められている。何れからも極めて好評を頂いており期待が大きいとのこと。

2023年度作品は次の通り

- ① 我孫子の文化を守る会:「手賀沼」に集った文化人」
- ② 我孫子野鳥を守る会:「デジタル紙芝居4作品」録音版
- ③ 大津川をきれいにする会:「よみがえれ大津川」ふたたびホテルの里に」
- ④ 大堀川の水辺をきれいにする会:「見守って」こうわたしたちの大堀川」
- ⑤ 岡発戸・都部の谷津を愛する会:「岡発戸・都部谷津

の危ない植物・葉になる植物」

⑥ 岡発戸・都部の谷津を愛する会:「岡発戸都部谷津のチョウ写真集」

⑦ 船戸の森の会:「船戸の森とドングリ」

⑧ 流山市立博物館友の会:「手賀沼むかしものがたり」改訂版

⑨ 岡発戸・都部の谷津を愛する会:「谷津・生き物たちの小宇宙」

⑩ 手賀沼水生物研究会:「手賀沼の魚と水生生物図鑑」である。

昨年度までの完成作品について、「柏市教育長」「我孫子市教育長」へ目録の贈呈済または贈呈が予定されている。また「柏市教育委員会」「我孫子市教育委員会」ではその活用についての検討が積極的だったことである。

3. 「手賀沼の水の水質調査」について

既報に「手賀沼船上調査」によってごく最近の手賀沼に「ヒメガマ」↓「マコモ」↓「ヨシ」の順に生育域・生育の量にこの数年の内かなり衰退が進み、特に「ヒメガマ」が極端に減少し、壊滅に近い様相を呈し、このままでは悲惨な結末の到来が危惧され、この原因の早急な分析・そして対応策が急務であることを報告した、またその間の「手賀沼内・南側」に広く繁茂していた「ハスの突然の消滅」も見逃すことはできない。本件関連については「残留農薬分析結果」の活用、目視・確認された「外来・在来水生植物の生育域、繁茂実態」報告実態等、継続中の「手賀沼の水の水質調査」が進行中だが、今後の進め方について、関係先への「アンケートの実施」を行った結果、千葉県に投げ掛けることや「手賀沼流域フォーラム」が他地域の実情調査により、地域比較ができるよう「バックデータ」を用意するなどの検討がされている。

4. 「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善

「よいよ」改善に着手か?
 この問題については、前号にて、昨年5月以降「千葉

県柏土木事務所」に向向いて打ち合わせを2回持った結果、去る12月に「先ず「**廃棄船「放置船」の対策から**県として実施する」との回答を得ていることを報告済だが、つい最近、作業が開始されたようだ。県回答の「**放置船「廃棄船」ではなかったが、4月初めその状況が眼に入った。それは「高野山地区の藤棚の遊歩道突き当り」にあった「工作物：グレーの鉄板塀で広く囲まれた内部が覆い隠されていた箇所」の、パネルが剥されたのだ。眼にする限り、この場所は少なくともこの20年はグレー色の鉄製パネルで覆われ、その中がどうなっているのか判らない状況だった。パネルが撤去され、露わにされた姿は、案の定古タイヤや、朽ちた放置船？など廃棄物の山」。そして何やら「**鉄骨構造物の残骸**」もある。(写真2～6参照)**

従前、2023年2月のパネルで覆い隠されていた状況(写真1)と今年(2024年4月2日撮影)の状況との比較写真に示す通りである。(1と写真2は同じ角度から見た状況を示す)

但し、この撤去工事を開始した主体が明らかではない。作業開始の「案内パネル」などの設置が無い。露わにされたこれら「**放棄物の山**」は、近々片つけられるのだろうか？今後の展開が楽しみである。

5. 美手連についての感想

私は美手連の諸活動が積極的で且つメンバーの連携情報の共有化が成されていて、「**活力ある市民の連合体**」だと感じる。運営委員会が毎月開催され、活発な意見交換が行われる他、行事によっては「**行政部署員も参加して行われる水質検査**」、さらに毎月実施される「**谷津の植物などの観察会**」、さらに「**勉強会**」や「**研修会**」などが開催されるなどがその一例だ。この活動が更に地域市民に認知され、広く市民の環境問題の関心の高まりひいては、**参画(繋がついていく)**ことを期待したい。

以上



写真1



写真2



写真4



写真5



写真6



写真3

に

~~~~~

〔連載第8回〕

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る》

その4の2

補助線一本（鼎と白秋の仲）を加えて、原田夫妻が、先ず「世田谷若林」に転居した背景を考察する》

平林 清江（会員）

二、原田夫妻が上京し、まず「世田谷若林」に転居した背景を考察する

さて、いよいよ、この回の本題に入り、原田京平・睦夫妻が、「世田谷若林」に転居するまでの背景を考察するのだが、その前に、再度、夫妻をして上京を決意させたと思われる4つの理由（動機）を、簡単に整理しておきたい。

まずは「消極的な理由」ではあるが、

①「我孫子在任白樺派の人々やその関連の友人達が、皆去つてしまつた我孫子は、京平にとつてさびしい場所となつたこと。」

次に「積極的な意味合い」を持つ理由として、

②「大正十五年開催の、当時としては、初めての唯一総合的な美術展覧会、第一回聖徳太子奉讃美術展覧会に委員として、作品を出品するよう聖徳太子奉讃会総裁久邇宮邦彦王殿下の台命を受け、二作品を出品（無鑑査）し、作品は同会制作・発行の図録に掲載されるという、大変な名誉に与つたこと。さらに、この展覧会は五年毎に開催されるので、作品発表の場として重要で大きな希望となつたこと。勿論、京平が大正十一年から参加し、同十二年からは毎年入選するという、「春陽会における活躍ぶりが、人の目に付きたこと」も、上京を促した大きな要因となつたことと思われ。

京平は歌人でもあつたが、

③「東京の短歌結社『白樺』や『槻の木』などの、師や会員達との交友がますます盛んになつたこと。」  
さらに、

④「学齢に達した長女麻那へ、夫妻が理想とする教育を受けさせたいという学校教育問題」などである。

①何故、世田谷で最初に住んだのは「若林」であつたのか？

原田夫妻が娘二人を伴つて、昭和三年二月二十八日、我孫子町を離れ上京、最初に住んだのは「世田谷若林」であつたことは、資料（前出）に明記されている。だが、番地についての記載がないので、原田京平ファミリーの転居先の番地及び、何故「若林」に住まつたのかについては、推測が難しく「不明」とするのが妥当と思われるが、ここでは、本稿の冒頭で述べたように、敢えて大胆な推理を働かせることを許していただく……。

前述の四つの理由から、我孫子町でスプリングボードを踏んで上京、何故、最初の着地点が「世田谷若林」であつたのか、何故最初に住んだのは「若林」であつたのか、ということについては、結論（推論）から述べてみる。

「原田京平・睦夫妻にとり、日本美術院洋画部以来（大正六年以来）の指導者山本鼎の導きによつて、まず、若林に落ちついた」と推察してみたのである。

この推論がもたらされたのは、筆者が偶然知つた次の「記事」からである。

歌人・詩人・童謡作家であつた北原白秋（注7）は、昭和3年4月、大田区旧馬込から現在の「世田谷区若林3丁目15番（世田谷における最初の住所地）に移転し、昭和6年、砧6丁目に移転するまで住んでいる。常盤塚を過ぎて、信号交差点を越えようと、右手のビルの間、北原白秋住居跡がある。白秋はここで、「世田谷風塵抄」と題する一連の短歌を詠んでいる。

〔Google 検索〕原文のまま

そこで、「北原白秋の略年譜」（『新日本文学アルバム25 北原白秋』所収）で確認してみると、確かに、昭和三年の項に「四月、馬込から世田谷若林に転居」と記されているが、この「略年譜」には、「若林」の番地は書かれていない、それ故この「記事」は貴重である。

さて、「記事」と「略年譜」二つの記述から、白秋が「若林」に転居した時期は、昭和3年4月であることが確認された。さらに、白秋と原田京平ファミリーが「若林」に転居した時期とが、ほぼ一致することも確認された。

次に、この「記事」に次のごとき「補助線一本」を加えてみる。

②加えてみた一本の補助線（鼎と白秋の仲）とは「北原白秋は、画家原田夫妻の恩師山本鼎の盟友で、大正六年、山本の姻戚ともなり、既に二人は心の隈も知りぬいた仲」であつた。

つまり、昭和三年四月、旧馬込から世田谷若林に移転する白秋からの情報を得て、山本が、上京を考えていた原田夫妻に、まず「世田谷若林」に住むよう、原田夫妻にアドバイス、あるいは導いたのではないだろうか。この時すでに、山本は、白秋の実の妹い多（家子）と結婚していたし、また、山本と白秋は、『方寸』『パンの会』などを通しての盟友であり、義理の兄弟でもあつたのである。

だが、結局、原田夫妻の若林での住まいの場所（番地）の確認は出来ず、借家なのか自家なのかも不明で、ましてや、若林での暮らしぶりなどもわからないままである。つまり、大胆な憶測にすぎないのではあるが、もし、師山本鼎によつて、原田京平・睦夫妻が「世田谷若林」へ、と導かれたとしたならば、その背景には、次の四点のことが存在していたと推察される。

①「師山本鼎と弟子の原田夫妻との、強い結びつき」、  
②「心の隈も知りぬいた、山本鼎と北原白秋との仲（盟友・姻戚）」、  
③「北原白秋が昭和3年4月、旧馬込町から世田谷若林に転居」、

④「昭和3年、明星学園に旧制中学校・旧制高等女学校が開設され、麻那の教育についての展望が開けたこと」などから、原田京平ファミリーが、上京を決意し、

その際に、まず「世田谷若林」に転居したということが、自然に受け容れられて来ないだろうか？

### ③ 山本鼎と北原白秋とのむすびつき(盟友・姻戚)

それでは、ここで、あらためて、山本鼎と北原白秋との「心の隈も知りぬいた仲」(小説「哥路」から引用)というところについて、読者の理解が得られるよう、次の2点の文章を記しておきたいと思う。

#### ① 山本鼎と北原白秋の諸活動『方寸』

##### 『パンの会』から見る二人のむすびつき

山本鼎(明治十五年十月〜昭和二十一年十月)は、明治四十年五月、洋画家の石井柏亭・小杉未醒(放菴)・森田恒友らと、美術・文芸雑誌『方寸』を創刊した。志賀直哉らの『白樺』(明治四十三年四月)より数年早く始まった『方寸』は、青年洋画家による創作版画の発表の場、同人雑誌として創刊されたが、山本らは、同人以外にも門戸を開いて寄稿を求めた。特に文学界と交流を行い、詩人の木下左太郎や北原白秋(隆吉)らが寄稿者として活躍したのである。

また、山本は、白秋・李太郎らと、明治四十一年十二月『パンの会』を隅田河畔(注8)に興じた。明治の末期において、『方寸』の同人たちと詩人たちとの会合、つまり、美術と文芸の交流から、新しい近代文芸を育てようとしたのが、『パンの会』の耽美主義的文芸運動であった。

この時期には、『スバル』(明治四十二年一月創刊)に続き、明治四十三年には『白樺』、永井荷風の『三田文学』(明治四十三年五月創刊)、谷崎潤一郎らの第二次『新思潮』(明治四十二年九月創刊)と、反自然主義の文芸雑誌が次々と発刊されるが、これらの同人も『パンの会』に参加した。『中央公論』の編集者瀧田樗陰



が、北原白秋・山本鼎・谷崎潤一郎の作品を一緒に掲載した動機には、この三人が、明治末期から反自然主義の立場を鮮明にし、それぞれの美術・文芸運動に強力にかかわって来たという共通項を持つている点があったと考えられる。

#### ② 小説「哥路」に見る鼎と白秋のむすびつき

『中央公論』(注9)第三十四卷第三号(大正八年三月一日発行・三六七号)の創作欄には、北原白秋の小説「葛飾文章―童と子鳩と哥路と―」、次に山本鼎の小説「哥路」(大正八年二月十九日執筆、最後に谷崎潤一郎の「画舫記」(蘇州紀行で、先月号からの続稿)が順に並べて掲載されている。

哥路は、もともと「葛飾文章」に登場する、白秋の家の飼犬のことであり、大正五年、白秋が、葛飾(南葛飾郡小岩村三谷・現江戸川区)の紫煙草舎(注10)で暮らした頃に飼った子犬のことであるが、大正六年には白秋は窮乏し、哥路を山本に譲ることになった。

小説「哥路」は、大正六年五月当時、山本の許嫁家子(小説では、ちる子)が、兄の白秋(小説では、詩人の三原)から哥路を譲りうけ、東京大塚の借家に住む山本(小説では、画家の私)の許に連れて来るところから始まる。

山本と北原家子(白秋の実妹)は、大正六年九月、森鷗外を仲人として結婚(注11)しているが、山本夫妻の住まいはめまぐるしく変わる。

小説の舞台は大正六年の東京と長野県の上田である。東京では、大塚から田端そして日暮里と移り住んでいる。山本は、大正六年以降、長野県を拠点として「児童自由画教育」・「農民美術運動」(注12)を策定し展開していた。

(下写真北原白秋)

山本と白秋の二つの作品からは、二人が姻戚関係にあることが知られ、



同じ子犬を飼うことになった事情・顛末などをよく知ることが出来る。

山本は、白秋の処女詩集「邪宗門」(明治四十二年三月)の版画挿絵を制作し、二人は、既に「心の隈も知りぬいた仲」であった。

ここに記した①と②の文章は、以前筆者が発表したことのある次の論文から引用したものである。その論文とは、「資料紹介 瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―」というものである。その論文の基となった、「書簡」の本文と、その概要を簡単に述べておきたいと思う。

拝啓 先日は久し振りにて拝眉を得嬉しく存し申候御送附下され候御玉稿 非常に面白く拝見仕り候全体としてちつとも危なくないものに候へ共 十一枚目の女を膝の上に抱き上げた所や最後の女の乳房を弄ぶ所(之は最も肝腎のところですが)などは 当局にて一寸首をひねる所かも知れぬと言ふやの気が致し候一両日中警保局に居る友人に逢ひ相談の上 早速結果御報告申上べく候三月号またく後れ四日頃でなければ発行六つかしく相成り候

其中の山本鼎氏の「哥路」(犬の名はよき作と存し候が 御一読の上御感想御洩らし下され候へ幸甚に候何れ近日中拝眉の節ゆるく申上べく候

謹言

(大正八年)三月一日 朝

志賀直哉様 侍史

瀧田哲太郎 拝

右で紹介した「書簡」は、大正から昭和にかけて、原田京平とその妻睦が所有していたものである。夫妻逝去後は、夫妻の長女麻那が継承、さらに麻那が平成十八年に逝去した後は、麻那の養子となった原田喬氏の所蔵となり、我孫子市白樺文学館への寄託を経て、現在は同館に寄贈されている。

この「書簡」は、大正八年に、中央公論社の敏腕編集

者瀧田樗陰(たきた ちよいん)が、小説家・白樺同人の志賀直哉にあてた「書簡」である。志賀直哉は、その我孫子町在任中に、共に同地に居住した原田京平との交友があり、志賀が京平に譲つたものと考えられる。

さて、この「書簡」に登場し話題になっている小説は、志賀直哉の「憐れな男」(中央公論春季大附録号第三十四卷第四号(大正八年四月一日発行・三六八号))と、山本鼎執筆の小説「哥路」の二作品であるが、今本稿でとりあげるのは、山本の書いた小説「哥路」の方である。

「書簡」の中で、「哥路」については、瀧田が志賀に一読を勧め、その感想まで求めているが、初めは白秋が飼ひ、次に山本が譲り受けた哥路という名の犬との関わり(出会いと別れ)を描いた作品なので、畜犬愛好家の志賀に読ませようとしたものだろうか？

平成二十二年(2010)年十一月二十日当時、本「書簡」の所蔵者原田喬・紀美子御夫妻に初めてお会いした際に、この「書簡」は、未発表とのことであった。そこで、筆者が公表を願ひ出たところ、同氏のご快諾を得、平成二十七年(2015)年一月、ある学会誌に資料紹介として掲載していただいた。

「資料紹介 瀧田哲太郎(樗陰)の志賀直哉宛書簡―原田喬氏所蔵・我孫子市白樺文学館寄託資料―」には、「書簡」から読み取れることとして、「志賀直哉の小説『憐れな男』、(小説「哥路」を手がかりとして見る山本鼎の諸活動)、などについて、調査し記しておいたものである。特に(山本鼎の諸活動)では、『方寸』『パンの会』を通しての山本と北原白秋との結びつき、さらに山本の小説「哥路」に見られる二人の結びつきについて調査し書き残しておいたのだが、その後、この時の記憶が再び、呼び覚まされたのは、次の二つの「記事」を発見した時(令和元年(2019)のこと)であった。

「昭和3年(1928) 31歳 3月28日 上京、世田谷若林に住む。」

「原田 睦八十八歳自選画集 所収 原田睦年譜 (著者原田睦 発行原田麻那 昭和59年9月20日)

「歌人・詩人・童謡作家であった北原白秋は、昭和3年4月、大田区旧馬込から現在の「世田谷区若林3丁目15番」(世田谷における最初の住所地)に移転し、昭和6年、砧6丁目に移転するまで住んでいる。常盤塚を過ぎて、信号交差点を越えようと、右手のビルの中に北原白秋住居跡がある。白秋はここで、「世田谷風塵抄」と題する一連の短歌を詠んでいる。」

【注釈】

(注7)北原白秋(きたはら はくしゅう)：歌人・詩人・童謡作家。 略年譜

明治十八年、一月二十五日、柳川市沖端町にて誕生。

父長太郎、母しげの長男。隆吉と命名。父は酒造を本業とした。明治三十二年、文学に志を立てる。 明治三十三年、雑誌「文庫」を、冬には「明星」を知る。 短歌初作。

明治三十四年、三月、大火に類焼、家産傾く。冬、回覧誌「蓬文」で白秋の雅号をきめる。

明治三十七年、早稲田大学英文科予科入学。 若山 牧水を知る。

明治三十九年、与謝野寛の招きで新詩社へ、五月「明星」に抒情小曲十篇を発表。上田敏 蒲原有明、薄田泣菫に知られる。

明治四十年、この冬から毎月、森鷗外邸の観潮楼歌会に招待され、佐佐木信綱、伊藤 左 千夫、齋藤茂吉、石川啄木らと交わる。木下柰太郎と南蛮文学を起す。

明治四十一年、象徴詩「謀反」を「新思潮」に発表。 柰 太郎、勇、長田秀雄らと新詩社を連 袂脱退。冬、柰太郎ら詩人や山本鼎

ら「方寸」の画家と「パンの会」を起す。

明治四十二年、一月、「スバル」創刊に参加。処女詩集

『邪宗門』装幀石井柏亭、挿画山本鼎刊。

十月、柰太郎らと「屋上庭園」創刊(二号で発禁処分、廃刊)。十一月、「方寸」同人らと信州大屋に遊ぶ。年

末、実家破産、一時帰郷。

明治四十四年、詩集「思ひ出」刊。九月、「思ひ出」出版記念会席上、上田敏に激賞される。

明治四十五年・大正元年、一家郷国を捨てる。

大正二年、処女歌集「桐の花」刊。四月、福島俊子と結婚。五月、一家を挙げ三崎向ヶ崎異人館に転居。

雑誌「白樺」十二月号に、短歌「泥豚」二十首が掲載される。十一月、巡礼詩社を創立。

大正四年、一月、萩原朔太郎を前橋に訪ね、約一週間滞在。四月、弟鉄雄と、阿蘭陀書房創立、「ARS」創刊。通巻七冊。

大正五年、五月、江口章子(えぐち あやこ)と結婚。千葉県東葛飾郡真間の亀井院に寄寓。七月、南葛飾郡小岩村二谷に移り、「紫煙草舎」(巡礼詩社を改称)を創立。十一月、「烟草の花」創刊、通巻二冊。清貧の中で、雀と哀歎する。

大正六年、上京。六月、窮乏を極める。弟鉄雄、出版社「アルス」創立。妹家子(いんこ)、山本鼎と結婚。

大正七年、三月小田原十字お花畑に転居。鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊に協力。童謡面を担当。

大正八年、三月、小説「葛飾文章」を「中央公論」に発表。窮乏を脱する。最初の童謡集『とんぼの眼玉』刊。

大正九年、小説「哥路の難」を「大阪朝日新聞」連載。事情あつて章子と離婚。

大正十年、一月、片上伸、山本鼎、岸辺福雄と「芸術

自由教育」創刊、通巻九冊。四月佐藤菊子と結婚。

昭和三年、一月「詩人協会」設立。四月、馬込から世田谷区若林に転居。

昭和六年、五月、砧村大蔵西山野に転居。

昭和十年、六月、多磨短歌会を結成、「多磨」創刊。

十一月、生誕五十年記念「白秋を歌う夕」日比谷公会堂で開催。

昭和十一年、砧村成城南の丘に転居。

昭和十六年、芸術院会員となる。

昭和十七年、慶応病院に入院。病床で創作続ける。十一月二日、帰寂。十二月二十一日、多磨墓地に埋骨。

「新潮日本文学アルバム25 北原白秋」略年譜 北原隆太郎（新潮社 一九八六年三月二五日発行）他

※筆者により、本文と関連のある個所に傍線を付した。

（注8）『パンの会を隅田河畔に興した』：『パンの会』の会場の名前と位置を取り上げた著書には、「不可思議国の探求者・木下太郎 観潮楼歌会の仲間たち」（丸井重孝著 二〇一七年十月十五日 短歌研究社）がある。

それによると、「パンの会の会場には変遷が見られるが、文献等から確認出来る会場は次の通りである。第一やまと（両国橋袂に近い矢ノ倉河岸両国公園）、三州屋、メゾン鴻の巣、永代亭、都川、松本楼、よか楼などである。

次に会場の位置がわかる資料として伊東市立木下太郎記念館に常設展示されている、明治四十二年の日本橋界隈の地図がある。木下太郎の実兄・太田圓三の遺品であり、まさにパンの会が盛会を極めていた当時の地図で、そこに会場の位置が示されている。現在の東京と較べると随分水路が多いことがわかる（遺品の実物は、水路が水色で着色されている）。当時は江戸の面影が残っていたのである」とある。

また、同著には、「パンの会が開催された回」と（明治41年から同45年まで）の出席者の名前が詳しく書

かれているので、筆者にとっては、有益で貴重な資料となった。

最初の会場「第一やまと」は両国公園の一角にあり、「西洋館まがいの木造三階建て」（かくして彼女は宴で語る）宮内悠介著だったとある。1908年（明治41年）12月発足のパンの会は反自然主義を掲げ、浪漫派の新しい芸術を目指した。江戸情緒とともに異国情緒を賛美し、最初の会場を「第一やまと」にしたのも隅田川をパリのセーヌ川に見立ててのことだった。美術家として参加したのは、洋画家・版画家の石井柏亭（1882〜1958年）、洋画家・版画家の山本鼎（1882〜1946年）、洋画家の森田恒友、洋画家の倉田白羊。遅れて彫刻・詩人の高村光太郎が参加する。

パンの会との関わりで注目されるのが、1907（明治40年）に、石井柏亭、山本鼎、森田恒友とともに創刊した美術・文芸雑誌「方寸」。創作版画の普及を目指した集まりで、後に洋画家の倉田白羊、洋画家の坂本繁二郎、洋画家・日本画家の小杉放菴らも同人となった。

パンの会の誕生はその翌年。「仏国印象主義者と文人とのカフェ・ゲルボアの会台のようなものを持ちたい。そうしてそこで酒を飲みながら自由に美術文学を語り合おうではないか」というのがその緒であったに相違ない。柏亭は「柏亭自伝」でそう振り返っており、画家のエドゥアール・マネ、クロード・モネ、作家エミール・ゾラらが交流した、パリのカフェ・ゲルボワのような場を目指したことが分かる。

パンの会 文学との響き合い（上）海外への憧憬と江戸情緒が同居 「美の粋」（日経新聞 2022（令和4年）11月6日）

\*パンの会の会台の様子を描いた絵画作品には、『パンの会』（1928年 岐阜県美術館寄託）がある。作者は木村莊八（1893〜1958）で、彼の代表作である。

（注9）『中央公論』（瀧田樗陰と「中央公論」）：『中央公

論』の編集者瀧田樗陰（たきた ちよいん 明治15・6・28〜大正14・10・27 本名哲太郎）は、東京大学英文科に在学中から、文筆に志していたが、内職に雑誌「中央公論」の「海外新潮」欄のための外国新聞雑誌の翻訳に従事していた。編集主任は近松秋江であった。はじめ「中央公論」は宗教的・倫理的色彩の強い、堅苦しい雑誌だったが、売れ行きが悪かったため、樗陰は時代の風潮に合わせ文芸欄を拡充し、小説を載せることを主張。文壇は人間性の暗黒を描く自然主義の勃興期にあり、社主の麻田駒之助は文芸を好まず、従来の方針を維持しようとしたが、樗陰の主張を入れ、小説を掲載すると売れ行きがよく、そのたびに発行部数が伸びた。

ことに明治38年11月の、創刊200号記念増大号は幸田露伴、泉鏡花、夏目漱石と人気作家の作品を並べたため好評で、以後年4回の「文芸付録」は文壇の檜舞台となり、ここに登場するかどうか作家の文壇的地位を決定するといわれるほどになったが、その採否はほとんど樗陰の意見によったので、樗陰は文壇作家の生殺与奪の権を握ったと言ってよかった。樗陰は新人発掘にも力をそそぎ、無名の作家でも、いったんその才能を認めると、立て続けに執筆させて活躍の機会を与えた。樗陰は黒塗りの人力車を乗り回して作家を訪問していたが、無名作家の家の前に彼の人力車が止まると、幸運の訪れのように言われ「樗陰の人力車」という造語を生んだ。

夏目漱石、徳田秋声、正宗白鳥、志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、永井荷風、谷崎潤一郎、佐藤春夫、広津和郎ら、明治の終わりから大正期にかけて活躍した作家の大部分は、殆ど樗陰によって発掘、あるいは育成されたといつていい。樗陰は愛憎の念が強く、自分の好尚に合わない作家は拒否した。そういう意味では、文壇に独裁的な権力をふるった。

樗陰は文芸だけでなく、政治、社会思想にも関心が深く、吉野作造、大山郁夫など進歩的評論家にもたびたび執筆させた。大正後期のデモクラシー思潮の隆盛は、樗陰がこれらの評論家を積極的に起用したこと



によることが多い。しかし、そこまでが彼の限界で、震災後、尖鋭極左社会主義とプロレタリア文学が起るに及んで、時代の最前線から一步退いたとの観が深いまもなく、彼の年齢に比して早い死が訪れ、彼の時代は終わった。

「日本近代文学大事典」第二巻(日本近代文学館編 講談社 昭和52年11月18日)

### 令和6年第1回「巨木・銘木をめぐる会」 実施報告

佐々木侑

四年ぶりの「巨木・銘木をめぐる会」が4月21日(日)に実施されました。晴天の朝9時に我孫子駅改札に4人が集合、上野公園、東京芸術大学構内の巨木・銘木の調査に出発しました。

上野公園内の桜は既にソメイヨシノはすべて散り、「関山」や「普賢象」などの八重咲きのサトザクラが残るだけでしたが、公園を散策する人々で混み合いインバウンドの観光客が特に多数見受けられました。

この時期の上野公園の巨木では、東京国立博物館本館の入り口前に見事などっしりした樹形の「ユリノキ」が見頃です。日本に初めて植樹(明治14年・1861年)されたユリノキの一本で樹齢150年の巨木です。花の開花は5月〜6月にかけて黄緑色の花が上向きに咲きます。花の形はチュウリップやユリに似ています。

続いて芸大構内の巨木観察に向かいました。この日は残念なことに、芸大が校内荒しにあり大学関係者以外の一般人は美術部構内入校を禁止し、校内奥までは入れない状況でした。守衛警備の方と入り口周辺あたりまでの許可を頂き、限られた範囲での巨木観察を行いました。

美術部講内での巨木は学生食堂周辺の「スダジイ」、「エノキ」、「トチノキ」、「菩提樹」を観察。次に『芸大奥の細道』と言われる周辺の樹林を観察しました。ここには鬱蒼とした樹林の中に芸大名物の巨木である「クスノキ」があります。その巨大さには圧倒されました。写真を参照して巨大さを確認してください。

この樹林の中には「クスノキ」以外にも「エノキ」、「タブノキ」、「ムクロジ」、「ケヤキ」、「ムクノキ」などが林立しています。「ムクロジ」の種がたくさん落ちて中には実生の幼木も見受けられました。



次に道路を隔てた芸大音楽部構内を観察しました。こちらは特に入校規制している様子はなく楽しくのんびりと観察ができました。正面にすがた形よく我々を迎えてくれた「タブノキ」、「マロニエともよばれる「トチノキ」、巨大な「カヤノキ」、「ヒマラヤシダー」、美しい木肌の「カリンの木」などを観察しました。

昼食は学生食堂の2階にあるホテルオークラ直営のミュージアムカフェで生ビールとランチを頂きました。本年再開しました「巨木・銘木をめぐる会」の第一回としましては、特段に楽しい観察会でした。

### 【プロジェクト報告】 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌その(28))

難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ  
みをつくしてや 恋ひわたるべき (800)

### 【現代語訳】

難波の入り江の芦を刈った根っこ(刈り根)の一節ではないが、たった一夜(ひとよ)だけの仮寝(かりね)のた

めに、漣標(みおつくし)のように身を尽くして生涯をかけて恋いがれ続けなくてはならないのでしょうか。

### 【語句】

【難波江】摂津国難波(現在の大阪府大阪市)の入り江で、芦が群生する低湿地。百人一首にも何首かに取り上げられている。「芦」や「刈り根」、「一節」、「漣標(みおつくし)」などと縁語になっている。【芦のかりねのひとよ】「難波江の芦の」までが序詞で、「かりねのひとよ」を導き出す。「かりねのひとよ」は「芦を刈り取った根(刈り根)のひとよ(一節)」という意味と、「仮寝(旅先での仮の宿り)の一夜」という意味を掛けている。「一節(ひとよ)」は、芦の茎の節から節の間のこと、短いことを表す。【みをつくしてや】「漣標(みをつくし)」は、船が入り江を航行する時の目印になるように立てられた杭のことで、身を滅ぼすほどに恋いがれる意味の「身を尽し」と掛詞になっている。「や」は疑問の係助詞。【恋ひわたるべき】「わたる」は長く続くこと。「べき」は推量の助動詞「べし」の連体形で、「みをつくしてや」の係助詞「や」の結びになる。

### 【作者】

皇嘉門院別当(こうかもんいんべつとう)。12世紀(ろ)



太皇太后宮亮(たいこうたいこうぐうのすけ)源俊隆(としたか)の娘で崇徳院皇后(皇嘉門院)聖子(せい)

し)に仕えた女房。生没年は不詳だが、1181年に出家して尼になったことが記録に残されている。別当は、家政を司る役目。

#### 【鑑賞】

女性の恋の歌という点、女性の許(夫)が出かけていくという、「通い婚」が慣習だった時代として、恋しい人を待つ歌が多いが、これは旅先で一夜の契りを交わした男のことが忘れられない、という歌である。

旅先で出会った人との一夜限りの短い恋。難波の入江に生えている芦の切った節のように短くはかない逢瀬だったのに、それゆえに一生身を焦がすような想いがつづつてしまった。こんな激情を「芦の刈り根」と「仮寝」、「一節(ひとよ)」と「一夜(ひとよ)」、「漂標(みおつくし)」と「身をつくし」などを掛詞としてあしらひ、技巧を凝らし尽くした歌として表現している。

当時の貴族の女性は旅をせず、外出しても従者を引き連れていたので旅先での恋という歌は難題だったろう。12世紀の頃は、難波潟のあたりには遊女が多かったそうで、この歌はそうした遊女の立場に自分を置いて、哀しい女のはかない恋を歌ったようだ。

さて、難波江というのは現在の大阪府大阪市の南部一帯の湾岸を指す。百人一首の19番伊勢の

難波潟 みじかき芦の ふしの間も

あはでこの世を過ぐしてよとや

の歌もあるが、大阪湾岸は開発と埋め立てが進み、歌枕としての面影はあまり残っていない。しかし海辺というのはそれだけでどこか感傷を誘う場所でもある。

#### 関連狂歌など

なには江の芦のかり寝の一夜たび

皇嘉門院別当御持参

なには江の芦のかり寝の一夜妻  
みをつくすこそなんのあだ浪

難波江の短きあしに長きあし

くらべて見ればたんちよつうの鶴

とりあへずよめる短歌は難波江の

よしやあしともままのカワセミ

(参考文献)

淡光ムック 百人一首入門 有吉保・神作光一 監修

(淡光社)

インターネット百人一首各種投稿文

史跡文学散歩第一四一回

## 「布佐の桜と新田次郎の足跡を訪ねる」に参加して

会員 芦崎 敬己

### 一 はじめに

去る三月二五日(月)我孫子の文化を守る会の第一四一回史跡文学散歩「布佐の桜と新田次郎の足跡を訪ねる」に参加しました。

令和六(二〇二四)年は、東京地方の桜の開花が三月二〇日頃と本州で一番早くなるかと初めのうちは言われましたが、開催二日前の二三日から二六日まで四日間雨が続きました。結局、東京地方の開花宣言は二九日となり、平年より五日遅く、昨年の一四日より一五日遅い開花となりました。

去年とは違ってほとんど遠ざかるこの様な開花状況に、観桜ツアーができるのかと一週間前から気が気ではありませんでした。

### 二 史跡文学散歩の概要

今回の史跡文学散歩は、当会の副会長村上智雅子さんの企画で、開催の前月からチラシを作り、会報紙でも参加を呼び掛けてきました。

村上さんは、市内の桜名所を手作り。パンフレット『我孫子の桜八景』にまとめられ、桜の花や桜の名所のオーソライティです。また、今回のテーマに掲げている山岳小説家で気象学者の「新田次郎」の研究者でもあります。

多くの日本人が愛する「桜のテーマ」と、『八甲田山』『孤高の人』等で多くのファン心を掴んだ「新田次郎」の

二つのテーマを融合させた今回の「布佐の桜と新田次郎の足跡を訪ねる」は、タイトルだけでも期待大です。

当日の行程は、我孫子駅北口のふれあい広場に集合し、一〇時に出発して新木野の気象台記念公園に移動します。その後、布佐の宮の森公園に向かい、続いて徒歩で竹内神社に移るコースで、それぞれの場所で桜の花を観賞します。湖北駅前の食事処で昼食を摂ります。一四時半頃に我孫子駅北口のふれあい広場に戻って、解散するスケジュールです。

場合により、昼食後に希望者のみで我孫子ゴルフ倶楽部での「市民観桜会」に参加しようとのオプションコースも検討していました。

### 三 当日の観桜ツアーの様子

当日は、朝からシトシトとあいにくの雨でした。

一〇時に我孫子駅北口のふれあい広場前に集合したのは、我孫子出発チームの二五人、一人が欠席で、参加者提供の車四台に分乗し、ふれあい広場を程なく出発しました。

布佐出発チームは、四人が一台に乗り、気象台記念公園で合流の予定です。

我孫子出発チームは、当初の予定を二か所追加し、鳥の博物館前の手賀沼親水広場駐車場わきの桜を見ました。ここには我孫子市桜プロジェクトに協賛した当会の「ヨウコウザクラ」が植えてあります。濃いピンク色の花が二分咲き程度の開花でした。雨の中で咲く桜をわざわざ見る

ことは、稀有な体験ですが、私には感動が湧きませんでした。

続いて、新木野の気象台記念公園に向かいました。

ここで布佐出



発チームの一  
行と合流し、  
公園内を散  
策しました。

村上さん  
は、手作りの  
パネルを掲げ  
て、布佐町で  
の新田次郎の  
足跡を説明  
しました。



ここには、当時中央気象台長だった布佐町出身の岡田武松が昭和一二(一九三八年)年に中央気象台布佐出張所を設置し、高層気象観測を無線機を付けた風船「ラジオゾンデ」で観測する施設でした。

ここに若き日の新田次郎(本名:藤原寛人)が転勤赴任し、観測器ラジオゾンデを担当しました。藤原寛人は昭和七(一九三二年)年に無線電信講習所(現:電気通信大学)を卒業し、二〇歳の時に中央気象台に入庁、富士山測候所(後に富士山頂観測所)を経て、布佐気象出張所に転勤しました。

そして翌年に両角てい(モロスマテイ)と結婚しました。藤原寛人は、ここで子どもを育て、徐々に日本人の中にも広まってきたテニスに夢中になったとのことです。昭和一八(一九四三年)に満州に赴任するまでの約五年間を布佐町で生活しました。

この布佐気象出張所は、昭和一六(一九四一年)に高層気象観測の業務が廃止され、気象送信所となり、平成一一(一九九九年)年に閉鎖されました。

平成一四(二〇〇二年)年に市民に開放されました。現在の気象台記念公園の芝生広場には、二三本の「ソメイヨシノ」の古木があります。公園開設前からのものですが、いつ植樹されたか不明とのこと。

更に、正面近くの左側に「ソメイヨシノ」が五本、向かい側に「オモイガワ(思川)」が七本植えられています。ここでも開花は未だでした。

これらの桜が開花して空の広い気象台記念公園で、

新田次郎がいた頃に思いを寄せるのも趣があると村上さんは語っています。

続いて、布佐の宮の森公園に移動しました。宮の森公園は、平成三(一九九一年)年に開園され、細長い形状ながら敷地の広い公園です。JR成田線の線路と並行して二〇〇メートルの「ソメイヨシノ」の桜トンネルができる所があります。電車を入れた桜の写真が撮れるベストポジションもあります。更に、車窓からの桜見物もお勧めとのことでした。

その後、隣接する竹内神社に車で移動しました。この神社は、承平年間(九三二年〜九三八年)の創建です。

平将門が活躍した時代と重なり、境内には、明治三八年(一九〇五年)に建立された日露戦争戦勝記念碑には、英文でタイトルがあり、その下に戦勝記念として植えられた桜樹五〇〇本を寄付した人の名前が刻まれ、松岡兄弟三人、松岡鼎(医者)、松岡(柳田)國男(民俗学者)、松岡静雄(海軍軍人・言語学者)、榎本次郎右衛門(衆議院議員)、大澤岳太郎(解剖学者)、井上次郎(手賀沼開発指導者)、一色正



輔(元布佐町長)の七名です。

その五〇〇本は、竹内神社、布佐小学校、中学校や市内各所に植えられ、その名残りの古木が境内に三〜四本残っているとのことでした。

また、竹内神社のご厚意で拜殿に上り、縁起などについてお話を聞く機会が設けられ、参加者全員で集合写真を撮って貰いました。

その後昼食会場に移る途中の国道三五六号線の平和台病院の近くの個人宅で入り口に「シダレザクラ」が咲くお宅に寄り、皆で桜を見せて頂いた。

家人は、快く奥の広い庭まで案内して下さった。

その中には、明治四五(一九一二年)、日米の親善交流でワシントンDCに送られた桜(二回目)三〇二〇本がポトマック



ク河畔で根付いた桜の里帰りした桜が植えられているとのこと。(聴き取りが不十分で内容が違っていたら済みません。)

両国の歴史に残る有名な話が身近になりました。その後、当初の計画時間通りに湖北駅近くの食事処で「海鮮ちらし」・「和牛焼肉丼」の昼食をそれぞれ摂りました。暫くの間コロナ禍で会食が思う様に出来ませんでした。少し疲れた身体を休めて、美味しく楽しい時間が持てました。

尚、我孫子ゴルフ倶楽部での市民観桜会は、雨天により中止、追加の観桜ツアーはありませんでした。

#### 四 桜の開花目予想

今年の開花予想は、何時咲くのかやきもきと振り回された感じがあります。

車で近くを移動する用事があるので、春先は北柏の松崎城址の「カワズザクラ」、柏市の手賀の丘や新柏の

さくら通り、松戸市六実のさくら通り、印西市の小林牧場、白井市の今井堤などの道を通ってよく咲き具合を確認しています。

桜がいつ開花するのか、気になるところですが、時々ニュースなどで耳にするのに「六〇〇℃の法則」というのがあります。

桜の開花は、前年の夏にできた桜の花芽が。秋から冬にかけて休眠状態に入り年を越します。低温の刺激を受けた後に気温が高まった段階で、花芽は休眠から目覚めます。これを「休眠打破」といいます。

気象情報会社などが行う開花予想は、この休眠打破の日を起算日として、温度変換日数を積算し、地点毎に定めた日数に到達した日を開花日と予想しているそうです。(ウエザーニューズHPから)

しかし、東京の桜については、「六〇〇℃の法則」では休眠打破を二月一日を起算日として捉え、以降の日々の最高気温の値を一日ずつ足していき、積算温度が六〇〇℃に到達すると、桜の蕾が目覚め開花する日として予測する簡易なやり方です。

### 五 桜の想い

私は、現役時代に勤務地が東京港区区内でしたので、業務で何度も青山霊園の西麻布方面から墓地中央に向かう南北に通る道に桜の木が覆うようにトンネルを作り、そこを車で走り抜けました。すると桜の花びらが舞い始めた頃は、見事にピンクのカーテンを曳いた様に巻き込まれていく様子がバックミラーに見事に映っています。

この時、綺麗に舞い落ちる花びらを、車で巻き込むことで美を壊している様な感覚になり、何故か坂口安吾の小説『桜の森の満開の下』を思い起こします。

『桜の森の満開の下』は、坂口安吾の代表作とも呼ばれる作品です。学生の頃に一度は読んだ記憶がありますが、先日図書館で借りて読みました。

都の人から金品を盗んで生計をたてている主人公の山賊は山に住んでいます。

ある時、盗みに入った家の女房があまりの美しさか

ら一目惚れして、その夫を殺し、女房を連れ去って一緒に暮らし始めます。しかし日が経つと女房は、気が強く我儘な性格で、狂気に陥ります。山賊に殺させ



た生首を弄ぶなどその正体を現します。

山賊は女の欲深い性格に辟易し、連れて来た時と同じように背負つて山に帰ることにします。途中で満開の桜の中を通った時にこの女が老婆の鬼に変わっている事に気がつきます。驚いた山賊は首を絞めて殺します。我に返った山賊が気が付くと、それは鬼ではなく女でした。女の顔におちた花びらを払おうと手をかざすと女の姿は消え、山賊も消えてしまうのです。

所々にグロテスクな表現もあり、薄気味の悪い作品ですが、主人公の山賊の心情の変化がよく描かれている異色作と言われています。

人間の心というものは本質的に孤独なものであると

いうことを山賊の心情の変化を通じて表現したかったのではないのでしょうか。

桜も女も山賊にとつては美しい存在です。美は時として人を狂わせてしまう魔術を秘めている様にも思われます。

ところで、当会が市民などの皆さんに呼び掛けて建立した天神山緑地(我孫子市緑一)の嘉納治五郎氏銅像の傍に桜の木があつて花びらがひらひらと舞つたらいいなと思います。あなたは如何ですか。



### 杉村楚人冠と「三田新聞」

美崎 大洋

#### まえがき

二か月前、突然『三田新聞クロニクル』第26号が送られてきた。「クロニクル」とは「年代記」や「編年史」を意味する。

三田新聞の「三田」と言えば慶應大学であるが、現在慶應大学内で発行されている学生新聞は『慶應塾生新聞』であり「三田新聞」(注)ではない。

(注)日本における最初の学生新聞は、大正六(1917)年に慶應義塾大学において創刊された『三田新聞』である。これに刺激を受ける形で大正九(1920)年には東京大学において『帝国大学新聞』(現在の東京大学新聞の前身)、その翌年には日本大学新聞『日大新聞』、翌々年には早稲田大学新聞、さらには『法政大学学友会報』(現在の法政大学新聞の前身)が創刊されるなど、多くの大学で学生新聞の発行が相次いだ。「三田新聞」は、昭和四十六年に廃刊した。



『三田新聞クロニクル』はさしずめ過去の「三田新聞復活版」ということか？この新聞が突然送られてきたことで、かつてのある記憶が忽然とよみがえった。その記憶について説明しようと思う。

約十年前、慶應大学の機関紙『三田評論』に「地元の偉人と三田新聞」のタイトルで小文を寄稿した。それは我孫子に住んだ杉村楚人冠が「三田新聞」の創刊に関わりがあったという非常にローカルな内容だった。「ローカル」と表現した真意は「沢山ある大学の中の一私立大学と地方の一都市我孫子に住んだ楚人冠との関係という、ほんの少数の人にしか関心がないだろう」と思われる内容だから」という意味である。

しかし世の中は広いもので、私の小文を読んだ方から連絡があった。その人はかつて学生時代に「三田新聞」の発行に関わった人で（昭和30年代に慶應大学に在籍か？）、実はその方たちが平成22（2010）年から「三田新聞を残そう会」を結成し「三田新聞クロニクル」を発行していたのだそうだ。それでもその方は楚人冠と「三田新聞」創刊の経緯はかなり昔のことというところで「存じなかったようだった。『三田新聞クロニクル』は私のところには過去に一度だけ送られてきたことがあるが、今回は、創刊以来編集長を務められていた方が亡くなられたという重大なニュースが掲載されているということ」で特別に送られたのだろう。今回の新聞が第26号であることから推測すると、年に2回の発行と思われるが、今まで送られてくることはなかった。冒頭に「突然」という表現を使った訳である。

我孫子の郷土史を学び、勉強しようとする我孫子市民は、我孫子市が編集、発行した『我孫子市史研究』などで勉強、知ることができ、『我孫子市史研究』は主に我孫子に住まわれたわれわれの先輩たちが調査、研究し、その結果を編集、掲載したものだ。

しかしそれらを読み、勉強することで我孫子の歴史のすべてが分かるという訳ではない。これらの本に掲載されていない、または公に表に出していない「埋もれている歴史」「隠れた事実」「知られていない裏ばなし」などが我孫子にはまだまだある筈である。『三田評論』に

寄稿した「楚人冠と三田新聞」の記事の内容もちょっとした偶然から発見されたもので、「埋もれた歴史」の発見のひとつと言えるかも知れない。『三田新聞クロニクル』により呼び起された昔の記憶から、杉村楚人冠が「三田新聞」の創刊に関わっていたことが分かった経緯を改めて書いてみたい。

**楚人冠関係資料目録**

平成17（2005）年3月、我孫子市教育委員会が編集した『杉村楚人冠関係資料目録』（3分冊）には楚人冠が残したすべての書籍、書簡、書類、書簡、書類外についてその内容が分かるようなタイトルと数行の概要が整理され収められている。その第II巻「書簡」の中に慶應三田新聞学会から送付された「三田新聞学会創立15周年記念（昭和7年6月）と「同20周年記念（昭和12年5月）の「晩餐会招待状」とタイトルが示された2項目を偶然発見した。楚人冠は東京法学院（現在の中央大学の前身）の出身とされているので、慶應義塾とは本来無関係の筈である。招待状が送られた理由について「当時東京朝日新聞の重役であった著名なジャーナリストとしての楚人冠ゆえではないかと私はその時は思った



それでも念のため『杉村楚人冠関係資料目録』第III巻「書類外」の中にその招待状に関する項目がないかと逐一見てみた。この分冊には生前、楚人冠が自ら切り抜き、台紙に貼り付けた新聞記事スクラップが数多く含まれている。新聞記者という職業柄、専門とするジャーナリズム関係記事が多いのは当然だが、その中に「三田新聞」に関するタイトルを持つ以下4点を発見した。

- ・昭和12年4月16日付け「三田新聞の創立20周年を迎えて」
- ・昭和12年5月5日付け「三田新聞創立20周年を祝す」学芸草創の頃を語る 座談会
- ・昭和12年6月15日付け（三田新聞）「塾生の「ジャーナリズム」調査」
- ・昭和12年12月10日付け（三田新聞）「塾生の「ジャーナリズム」調査」

謹啓 時下益々御清吉のこと、お慶申上げます。本紙も諸君の御熱誠なる御支援によりて逐年増進を遂げ、本年は大正六年に本紙が創刊されてより満廿年に達するの、これを記念するたぐに各種の記念事業を行ひつゝ、ありますが其の一として記念晩餐会を開催し本紙の新聞研究並に発行に際して多量編輯、経営の御指導共の他に御努力下された方々の御恩顧に對して御かまひとも敬意を表し度いと存じます。御多忙中恐れ入りますが来る十五日（二十日）午後六時目黒御茶園まで御來賓の程を切に御願ひ申上げます。敬具

昭和十二年五月 慶應義塾 三田新聞學會

杉村楚人冠様

拜啓 益々御清康未賀儀 陳者本年本學會創立十五年に相當致儀に付ては來六月十一日（二十日）午後六時、丸ノ内會館に於て記念晩餐會開催致儀間御貴臨の榮を度記段御案内申上儀 敬具

昭和七年六月 慶應 三田新聞學會

前述のようにこれらの『資料目録』は単にタイトルや概要を記録しただけのもので「書簡」「書類外」それぞれ申請処理をして現物のコピーを手に入れた。「書簡」の案内状の現物は葉書形式(前掲)であり、「書類外」のスクラップの現物はいずれも「三田新聞」の楚人冠に関する記事を楚人冠自ら切り抜き、台紙に貼り付けたものであった。

ところで軽妙な文章、随筆で知られる楚人冠は、朝日新聞社記者として新聞に掲載する記事や評論を書くのは勿論のことであるが、一方で専門とする新聞、新聞学に関する著作、本として『最近新聞紙学』『新聞の話』『新聞紙の内外』『新聞視角』などを残している。当時はまた「ジャーナリズム」に適応する日本語がなかったことからこの言葉を楚人冠は「新聞紙学」と名付けた。そして『最近新聞紙学』出版に際して、当初楚人冠は、その本のタイトルを「新聞紙の製作研究」と仮に名付けたようだが、あまりに専門しみていたので、「新聞紙学」の方が一般受けすると感じたようである。現在では「新聞」と「新聞紙」はほぼ同意義として使用されるが、当時は「新聞」はそれこそ「ニュース、新しく聞いた話」という意味で使われていたことから両者を厳密に峻別する必要があったのだろう。

また『最近新聞紙学』の初版本は大正四(1915)年「慶應義塾出版」から出版されていることが判明した(同書は昭和十三(1938)年に発行された)楚人冠全集『第13巻に収蔵されており、さらに昭和四十五(1970)年中央大学出版部から復刻されている)。この初版本が楚人冠の卒業した中央大学関係の出版社ではなく、慶應義塾出版から出版されたことに、何故だろうと疑問が膨らんだ。さらにこの本の巻頭言の中に「最初の原稿は中央大学(注)と慶應義塾との講話に用いた講本であったが、……という件があるのを見て、楚人冠と慶應の関係について興味と疑問がますます深まると同時に、私のなかである期待に変化していった。(注)「中央大学七十年史(昭和三十年十月)によると楚人冠は以前、明治四十三年二月に出身校である中央大学(当時は東京法学院で「新聞研究科」の講座を

もっていたことがある。このとき楚人冠は「中央大学学員」として講師を務めたようだが、その時楚人冠と共に講師を務めたのは東京朝日新聞の同僚であり同じ中央大学出身の洪川玄耳であった。この科の特色は「修業の上は総て予約に応じて夫々各新聞社に分配」することにあつたが、「あまりに実用的な企画であつたために、反つて卑俗の感を与え、高尚な学理をのみ尊ぶ傾向にあつた学生の気風にあわなかつたものか」などの理由で同年十一月に第一回修学生7名を出したのみで自然閉鎖された。

#### 「三田新聞」を慶應義塾図書館で調査

『慶應義塾との講話に用いた講本』としての『最近新聞紙学』の初版本が出たのは大正四年十二月。執筆、編集などを経て出版に至るまでに要する年月を考慮すると、楚人冠が慶應大学で講義をしたのはその2、3年前ということになろう。一方、前述の書簡、切り抜き記事がそれぞれ三田新聞創立15周年(昭和七年から遡る)、20周年(昭和十二年から遡る)に関する内容であることから、その数字から「三田新聞」創立の年を逆算するとちょうど大正六年となる。楚人冠がその創立に何かしら関わっていた可能性が出てきた。

今は廃刊となつているが、当時の「三田新聞」は、当然慶應大学に保存、保管されているのではないかと思ひ、三田にある慶應義塾図書館を訪ねた。入館の手続きをしてエレベーターで地下4階に降り、事前に係りの人に聞いていた全国の大学関係の古い書籍が置かれてある書架に行く。

残念ながら当時発行されていた「三田新聞」の現物はなく、その代わりにというか、創刊号から(廃刊までの)全ての「三田新聞」が縮刷版(注)書籍(復刻版)として書架の一角に収められていた。不二出版が発行した「全14巻・別冊1(復刻版)」である。

(注)最初の新聞縮刷版は、大正八年に『東京朝日新聞』が発行した大正八年七月号(8月15日付発行、ただし実際の発行日は8月26日)である。本紙発行後にある程度の採算をめざして定期的に一定部数を発行する、

という形での縮刷版の発行は、当時、世界的に見ても類例のないものであった。発案者は東京朝日新聞調査部長の杉村楚人冠で、もともとは新聞のバックナンバーの保存・管理をしやすくするために思いついたものである。ヒントになったのは、白虹事件(注)の公判に際し、『大阪朝日新聞』を写真製版による網版印刷で菊判に縮刷したものが証拠物件として提出されたことであつたという。菊判では字が小さくなりすぎるため、石版印刷で菊倍判(もとのブランケット紙面の約4分の1のサイズ)に縮刷したものを作成することにし、当初は社内用に少数数作るつもりでいたところ、3000部以上売れば採算がとれることがわかり、一般への販売を行うことになった。

(注)白虹事件(はつこうじけん)とは、大阪朝日新聞現朝日新聞)が1918年に掲載した記事において発生した筆禍、あるいは政府当局による言論統制事件。詳細は省略。

発行当時の「三田新聞」の実物はタブロイド版(普通の新聞紙1ページの半分のサイズ・語義としては、要約し、圧縮した)という意味の大きさで、発行所「三田新聞會」東京市芝区三田慶應義塾内とある。そのタブロイド版をさらに縮小した縮刷版のため目を凝らさないと文字は読めない。何か新しい発見が期待できそうな高揚した気持ちとともに、腹を据えながら漏れなく調べなくてはと場所を変え、図書館内の無人の部屋の隅にボツンと置かれた小さな机の前に座り、創刊号を掲載する1冊目から、丹念に「楚人冠」「杉村広太郎」という文字が現れる記事はないかと逐一探した。その結果、関係する記事はかなりの頻度で出てきた。

#### 「楚人冠」「杉村広太郎」が出現する記事掲載の号

##### ① 大正六年七月六日創刊号

1面トップに掲げた「創刊語」(次ページ「三田新聞」見出し参照)の文中、杉村廣太郎の名前がでてくる。

第一号 大正六年七月六日 編集人 小林俊一、発行人 小玉琢朗、発行所東京市芝区三田慶應義塾内三田

新聞会

「吾人は現下の大勢に鑑み将来の活躍に資せんがために、新聞科廃止の後を承けて茲に「三田新聞会」を創設し、楚人冠杉村広太郎氏、林、占部両教授の指導監督の下にあつて新聞紙学の実験を研究すべく、新に「三田新聞」を發刊す。」



②大正七年八月二十一日第十一号

「宣言 三田新聞学会は昨大正六年春新聞に関する一切の事項を研究するの目的を以て創立せられたる学生の自治的学会にして、現に其会員として各分科学生約百名を有する一の研究組織なり。創立以来会長に大学部政治科学長林毅陸氏を、副会長に同教授占部百太郎氏を、顧問に東京朝日新聞調査部長杉村楚人冠氏を戴き、正課の傍ら理論は是れを講義並に読書に、実際は是れを三田新聞の發行に依りて、新聞紙の徹底的研究に歩を進めつゝあるものにして、固より営利に非ず、娯楽に非らざる、而も、吾人が通常の努力を以てしては到底巨額の資金を有する欧米各大学の新聞科の設備整然、規模の広大なるには遠く及

ばずと雖も、尠くも日本に於ける新聞学の最始にして且つ最高の学府たる面目を保持するのみならず、将来に於ては之を…。」

新聞紙法(注)による保証金を支払つたことから、この号(第十一号)から立派に一般新聞として認められ正式に号数も印刷されるようになった。

(注)新聞紙法1909(明治42)年5月6日に公布された全文45条と付則からなる戦前日本における言論統制のための基本法。実際には日刊新聞紙のほか、時事に関する事項を掲載する定期刊行雑誌にも適用された。1949(昭和24)年5月24日に廃止。

③大正七年十月十四日第十四号

三田新聞学会主催の「大講演会」と「新聞に関する展覽会」が開かれるという記事が紹介されている。大講演会の会次第には「開会の辞」は楚人冠が三田新聞学会顧問という肩書きで行うようになっている。

④大正八年六月三十日第二十五号

「杉村広太郎氏の榮譽」として「東京朝日新聞調査部長にして本学会顧問たる楚人冠が米國ミズーリー州立大学新聞科学長のウォルター・ウィリアムズ氏の紹介で英国インスティテュート・オブ・ジャーナリズムの会員に推薦された」と報じている。

⑤大正九年七月三十一日第五十号

五十号という節目に特集を組んだ形で数名による「祝辞」の寄稿文が並ぶなかに「五十號に際して」と題して楚人冠自ら寄稿している。

「…一體今の新聞紙にはあき足らぬ事が頗る多い。…三田新聞發行以來、自分は機會のある毎に口を酸くして是を説いてゐるが、今こそ一向顧みられない。而して依然として今の現在新聞紙の眞似ばかりしてゐて、之から一頭地を抜かうといふ勇猛心がない。…名は三田新聞といふが時事新報や朝日新聞や報知新聞を眞似た模造時事新報、模造朝日新聞、模造報知新聞たるに過ぎない。何が故に百尺竿頭は今一歩を進むるの覺悟が出来ないのであらうか。三田新聞も五十號になった。依然たる人眞似は年の手前もある。…」

楚人冠の面目躍如たる辛口の論評である。相手が

学生であることを斟酌しないしかつ容赦していない。物事の本質を的確に見抜き、ストレートに表現するプロのジャーナリストとしての気持である。周りの記事がお世辞を含んだ提灯持ち、祝福の記事ばかりなので「身内」の楚人冠の記事はひときわ異彩を放つ。

⑥大正十一年六月七日

節目となる100号にも楚人冠は到底祝辞とは言い難い辛口のコメントを寄稿している。

「百號と聞いて」本學會顧問 東京朝日調査部長 杉村廣太郎(大正十一年六月七日)

「三田新聞の第百號になったから何か感想を書いて呉れといつて来た。感想を書けといふのは、大抵の場合ほめよくいふ事になる併し私はほめない。三田新聞が日本で初めての大新聞であつて今日同じ種類のものゝ数出た中では、何としても大先輩である。併し先輩といふは年が取つたばかりの能ではすまぬ。先輩なら先輩らしい所がなければなるまいと思ふが、偕(さて)何處にそんな處がある。…(略)」

⑦大正十五年五月二十八日(第175号)

「新聞講座開設さる」という見出しで楚人冠を主任講師とする記事を掲載。

⑧大正十五年九月二十九日(第180号)

「新聞講座講師紹介」として楚人冠ともう一人の講師を写真入りで紹介している。

⑨昭和七年六月十七日「三田新聞学会創立15周年記念」新聞講座と三田新聞

「記念祝宴席上の演説に代へて 杉村廣太郎」の記事(詳細は後述)

⑩昭和十二年五月五日(第370号)創刊当時の思い出話を掲載

楚人冠は日記の記録をもとに当時の様子を語り、その結果、新聞科開設から新聞發行までの事実関係が明らかにされる。

楚人冠「大正七年の五月二十三日に社(東京朝日新聞)へ来て学校で新聞研究科をやるから引き受けてくれぬかという話があつて、私は何の気なしに引き受けたい。…」

## 楚人冠が「三田新聞」創刊に関係

以上、大正六年創刊号から昭和十二年の第370号まで約二十年の間に楚人冠に関する多くの記事が掲載されていたことが判明した。

前述昭和七年六月十七日発行の「三田新聞学会創立15周年記念」号で楚人冠は創刊当時の思い出話として「三田新聞」創刊の経緯を掲載している。「記念祝宴席上の演説に代へて」杉村廣太郎の見出しで書かれた内容は要約すると以下の通りである。

大正二年の五月、当時の慶應大学の理事石田新太郎氏から、朝日新聞社にいた楚人冠に次のような依頼があった。「従来新聞記者の中に早稲田出身の方が大変多いが、慶應出身者がいないことから、慶應大学内に新聞科を設けて新聞記者を養成したい(ので講師を派遣してほしい)。さらにその新聞科には大学内の最高級学生中から希望者を選んでその学生には月謝を免除する仕組にしたい。」

これと同時に学内には正式な公告が出た。

「新聞記者志望學生の奨励 義塾にては今回新聞記者志望者を奨励する趣旨を以て、現在在學中の大學部本科3年生中より志望者を募集し、試験の上にて特に10名を限り在學中の授業料を免除し、以て一方新聞記者に必要な知識を授けると共に文筆の趣味涵養するに力むる筈にて、目下該志望者募集なり。」(慶應義塾學報第一九〇号、大正二年五月刊)

記事は楚人冠の言葉として以下のように掲載している。

「新聞科は私(楚人冠)が一週間に一度、つゝ新聞講座を受持ち新聞の話をし、その他二三同業の先輩が指導して新聞の編輯に関する實務を練習するのと位のことでありました。私の講座はその年の五月三十一日に始めて、十一月十五日に終りこれが曲りなりに一期をすませたことになりました。この一期経験によつて、どうしても塾生の實習用として一つ大學新聞を發行しなければならぬといふ希望をしれば塾の當局に陳情したのであります。しかし當局では何分金のかゝる事であるから、中々うんと承知してくれない。今考へても冷汗の出るやうな話ですが、その當時ふと私が口を滑らして、

アメリカの大學では何處でも大學新聞を發行してゐるぢやないかと、いひましたところ、丁度アメリカの大學を視察して歸つて来たばかりの石田君に、そんなことはありません、と一言の下に斥けられたことを、今に記憶して居ります。」

新聞科は毎年講師陣の多少の異動はあつたものの大正五年度(大正六年春)まで継続し春には新聞記者の卵を卒業させていた。しかし大正六年の新学期にはこの講座も新規に募集をせず、新聞科は廃止される。廃止の背景には大学の思惑もあつた。大学当局は本科3年生(大正七(1918)年までは本科3年・予科2年、それ以降は予科3年)の中から十名を選抜し学費を免除して与える限りの努力を払い、社会に一人でも多く良い記者を送らうとした。杉村楚人冠は組織立った「新聞紙学の概念」を教え、黒岩周六講師は「新聞論」、山本昌一講師は「營業販売」、川面弘講師は「外国電報」を受け持った。さてそれほどの熱意をもつて創設された新聞科も当局の期待に背くものがあつた。すなわち在學中新聞科に籍を置きながら卒業すればさつさと実業会社に就職するという始末で、ついに大正六年の新学期には新聞科聴講生の募集は沙汰止みとなり、この講座は結果的に大正六年に廃講となつてしまつたのである。大いに失望した学生は直ちに(独立任意団体として)「三田新聞会」を創立し、楚人冠は顧問という立場で引き続き指導にあたつた。

改めて「三田新聞学会創立15周年記念」新聞講座と「三田新聞」(昭和七年六月十七日)の楚人冠の談話の一部を引用する。

「記念祝宴席上の演説に代へて」杉村廣太郎

「……これより先私は約二學期の間、講座を引受けて居りましたが、どうも大學の講座などといふことになると、つい鹿爪らしくなつて、何がな理窟めいた事を講義するやうな心持でなければ相すまぬ気がしてついつい理窟ばかりいふ事になりこんな事では實地の修業にならないことをしじみ痛感いたしました。丁度大正三年から欧州戦争のため私がロンドンに特派されて、翌年米國を経て歸朝の途中紐育の「ロンドン」大學の新聞學

校を視察しましたところ、同校の講座といふのは、教室の中で先生と學生とが圓卓を取りんで、互に煙草をふかしながら、丸で何かの相談でもしてゐるやうに、色々の事も話し合つてゐるのを見ました。私も校長から頼まれて、一日レクチュアに行つたことがありますが、レクチュアとはいふものゝ、私が一くさり講話をすると、後は學生中から質問が續出して、レクチュアといふよりも「ヂスカッション」になつてしまひました。なるほど新聞講座はかういふ體裁でやる方がよからうと思ひつきました。それに今までの新聞科の仕組では大學の最高級のものをだけを探ることになつて居たのだから、卒業論文の準備や何かで忙しい最中に、僅かばかり新聞講話を聴いて、少し新聞の事が分る時分にはもう學校も出てしまふことになる。又いくら新聞記者志望でこの新聞科に入りたいたいものがあつても、最高級に入る迄はどうする事も出来ないといふ不便があるそれやこれやでどうも面白く行かないので私は米國から歸るとすぐこの次第を石田君にお話いたしました大學の講座といふよりも學生の團體と互に話し合うやうな組織に改めることになりました。この團體が即ち三田新聞会でこれが大正七年に三田新聞学会と改稱し、同時に積年の懸案であつた新聞發行の事に運んだのであります。……」

独立団体として設立した三田新聞会も(大學が講座として設置していた)新聞科のときと同様、本科3年の學生のみとなつていた。しかし本科3年生は翌年春には卒業してしまつたため、組織として継ぐべき何物も残さず去つてしまつたという問題点が表面化する。三田新聞会では新聞紙学の実際を研究するため、新たに「三田新聞」を發刊した。かくして大正六年七月六日、「三田新聞」(タブロイド版、2頁)が創刊されたのである。

昭和三十三年六月一日発行の「三田新聞第800号」に、創刊に立ち会つた卒業生の回顧談が掲載されている。

「大正六年晩春の頃の思い出。楚人冠氏の前の新聞大の白紙が見る々中に青鉛筆で一杯になつたこれが第一面で論説欄、これが第二面、第三面で雑報欄、最後が文芸



欄にでもしたら好いでしよう」楚人冠氏はすっかり決めてしまっている。皆は黙って聞く「それで新聞を実際に造っていくんですか誰かが質問の第一」そうです、それが実際研究にはもってこいです。以前に只新聞講座だけをやったことがあったが、理論だけじゃ矢張り駄目です。実際やってみなくちゃ……楚人冠氏の眼鏡がキラリと光る「ウフ……集まった人々の顔に思わず浮かぶ微笑、「好いなア」「面白いぞ」皆、思いがけぬ喜びに有頂天になつてしまつた。楚人冠氏もやつと計画がなつてホツとしたらしく葉巻の煙をゆるやかに吐いていた。こうして第一回の会合を終つたのは午後五時頃だつたらう。それから二、三回の会合を終つて初めて三田新聞が出た。」



七月に創刊した三田新聞は3ヶ月後に第2号、3号を発行、さらにその1ヶ月後に第4号と発行は不定期で、表示も擬国会号(大正六年十月二十七日)、神楽月号(大正六年十一月二十一日)、春待月号(大正六年十二月十三日)無題号(大正七年二月二十五日)、運動会記念号(大正七年五月十二日)この月、三田新聞会は三田新聞学会と名前を変えた、文芸号(大正七年六月五日)帰省号(大正七年七月六日)などとして発行された。しかし新聞紙法による保証金を支払つたことから、第十一号から一般新聞として認められ正式に号数も印刷されるようになった(前述)。

あとがき

「三田新聞」の創刊に楚人冠が深く、密接に関係していたことが解つた。創刊後も三田新聞会主催で楚人冠を講師とした講座が開かれるなど「三田新聞」と楚人冠の関係は続いた。「三田新聞」が日本どころか東洋初の学生新聞であり、その後、東京大学において「帝国大学新聞」が発行され、引き続き各大学における学

生新聞発行のきっかけになつたことを考えると、楚人冠と三田新聞の関係は単にローカルな話題とは言えず、(新聞の)歴史的にも重大なことであり、重要な意味を持つことになる。多くの有名人を輩出している慶應義塾という大きな組織の永い歴史の中では「楚人冠」の存在さえ、埋没してしまつても止むを得ないことも知れない。一方、楚人冠の経歴のなかでも特定の大学との関係を取り立てて言うまでもなく、埋没してしまうのも致し方ないことであろう。しかし我孫子に住む者が我孫子に関係の深い楚人冠と「三田新聞」の関係にフォーカスすると、他人からたとえ「一人よがり」と言われたとしても別の景色、ストーリーが見えてくるのは興味深い。

「三田新聞」は戦前、戦中、戦後時代に慶應義塾大学で学生の間、また教師と学生の創造的な対話の媒体であつた。時には激しい矛盾と対立、また時には強調と連帯のうちに創造的な対話を目指して発行されてきたといえる。しかし1960年代末からの学園騒動はそうした対話を挫折させ、「三田新聞」に永い休眠を強いることになり、1971年「三田新聞」は廃刊となつた。その後1980年代の大衆消費の市場経済の影響は大学にも及び、大学の風俗化が目立つようになつた。1991年6月10日、第1363号(復刻号)として再び「三田新聞」は発行されたが、精彩を放つことはなく、かつての面影もなかつたという。

(参考)

「三田新聞」が縮刷版(不二出版)、ウイキペディア

## 五団体会議報告(同議事録より転載)

議題

(1)前回(3月26日)の決議の再考

①五団体共同で市内の歴史遺産の誘導板・説明板の総点検を行う。

②「ふるさと我孫子のアルバム」第2号の作成

以上2点に付き再協議をお願いする。

結果

①歴史遺産の誘導板・説明板の点検は市史研(ニモク

会が担当)が僅かであるが、発進・進行している現状に鑑み、これに重点を置いている「ガイドクラブ」と協働し進めていく。↓次回のニモク会合にガイドクラブが参加する。

他の三団体は「景観を育てる会」が進めている「白樺派のまちの見える化運動」に協力する。

二つのプロジェクトは緊密に連絡を取り合い、協力して我孫子市の文化遺産の保存に貢献する。

②「アルバム」の第2号作成は意義のある事、1号作成委員会に携わつた人たちが(みんなのアルバム同好会)や遺したフィルムなどは年月の流れの中に霧散していく恐れがある。ゆえに、一日も早くこれを引き継ぐべく、当時の人たちと接触する。

(市史研(岡本・荒井・東)は自分、50年事業関連の業務で余裕なく、美崎氏(文化を守る会)を中心に進める。：島昭子会長・村田源子氏・越岡禎子氏らとの面接を始めとする。

(2)「我孫子市文化財保存活用地域計画協議会」傍聴(東京圏)の報告

①認可後4年目を迎えた今年に入り市教委の取り組みも具体化が進んでいる。

・今夏よりボランティア養成講座(ガイドの養成・資料調査員の養成)が開設される。

7月・募集開始 8月・講座開催(座学(1日)・実地(半日)) 9月・総会(スタッフの顔合わせ) これを年度内に2回行う。

・保存活用の現在の進捗状況

・誘導板・説明板を湖北地区、我孫子地区に設置、井上家住宅に屋外トイレとサイクルラックを設置した。との事

・文化財の収蔵庫関係

私達が要請していた文化財の収蔵庫(旧ヤング手賀沼建物)が年度内に改修工事を始める。

(3)新任の渡辺健成副市長への陳情

6月中に面会をお願いし、これまでの経過と要請を訴える。

第四十六回短歌の会(最終採択の二首)

三月二十六日実施

雨音の止みてカーテン開けたれば  
綿雪ふわり小径に降る

橋近き蕎麦屋の御膳堪能し  
八十路の集い談笑止まず  
村上 智雅子

ひ孫とう赤子に会えり孫よりも  
子よりも気楽にほほをつつけり

大和絵を見終るまでに人に酔い  
二回も休む老いにけらしな  
納見 美恵子

思ひ出す白いブラウスのうしろすがた  
優しさあふれた女せんせい

ふるさとのブランコのある六角堂  
母を泣かせたあの日を悔やむ  
佐々木 侑

いつの間にすくっと立って席譲る  
小雨降る外じつと見る孫

寒空に小鳥さええずる多摩の丘  
父母に会え眠る従姉妹は  
芦崎 敬己

「おいしい」と一度も言わぬ我なれば  
「好きだよ」などどうして言える

「勉強しろ」今は「自分の周り片づけて」  
やる気が失せる不思議な言葉  
美崎 大洋

ときめきの言葉は過去となりていま  
君と出会いぬ葬列の中

実直に生きし男の遺志のごと  
焼かるる煙真直に昇る  
伊奈野 道子

市の令和6年度当初予算が可決されました。  
一般会計は、前年度に比べ8.0パーセント増の467億6000万円となりました。また一般会計に3つの特別会計と下水道事業会計、水道事業会計を加えた予算総額は、前年度に比べ38億1650万円増の824億2028万円となりました。  
一般会計予算が34億6000万円増額となったのは、児童手当や障害者自立支援給付費、児童通所支援給付費など民生費の増額によるものです。介護保険特別会計は生活支援サービス利用者の増加に伴い地域支援事業費が増額となることなどから、対前年度比0.4%の増となっています。後期高齢者医療特別会計は、後期高齢者医療広域連合に対する納付金が増額となることなどから、対前年度比6.8%の増となっています。(我孫子市より)

楚人冠俳句

昭和九年春

瑞垣(みずがき)や椿たわくに花を垂れ

瑞垣：神社などの周囲に設けた垣根。また、神霊の宿ると考えられた山・森・木などの周囲に巡らした垣。玉垣。神垣。斎垣。

明けやらぬ山気冷やかに梅まばら

碑と梅と併せ容れ得ぬカメラかな

尼寺や對のそろはぬ古雛(ひいな)

春暁や寝ながらに聴く雨の音

風向きや折々に見る谷の花

長谷寺にて(二句)  
渡殿に香染の僧衣霞みけり

もくもくと山盛り上る新樹かな

当会の行事予定

令和6年度総会

日時 6月23日(日) 14時

場所 我孫子市民プラザ会議室1

プロジェクト「短歌の会」

第四十七回短歌の会

日時 5月28日(火) 13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

プロジェクト「巨木、銘木をめぐる会」

日時 6月16日(日曜日)9時 我孫子駅改札口集合

観察先 上野公園・東京芸術大学構内

連絡先 佐々木 ○九〇―二五九四―〇四二五

関連(当会所属)団体行事予定

美手連總會

日時 6月8日(土) 13時〜16時30分

場所 手賀沼親水広場「水の館」3階研修室

編集後記 電車やバスなど、公共交通機関に乗ると、「優先席」がある。お年寄り(何歳からの表示はない)、妊婦などの方の優先席というステッカーが貼つてある。鉄道会社によっては、「優先座席」とか「専用席」、なかには「おもいやりゾーン」と呼称しているところもある。妊婦とか身体の不自由な人、病気の人も優先席のため優先席である▼先日、我孫子駅で荷物を持って乗り込み、真先に優先席を見ると、若い女性3人が座席を占有しているばかりか、3人とも頭を傾け正体なく眠っている。私は上野までの乗車なのでできれば座って行きたいとの願望があり、ひよっとして3人のうち誰かが目を覚まして私を認めて席を譲ってくれはしないかなどと勝手な期待もした。しかし座席でいかにも疲れたという様子で眠っている3人を改めて見ると、「優先席」であっても本当に座るべき人はこのように疲れた人とか弱い人であるべきで、年寄りというだけの理由で座る権利などないな、とその時思い直した。大事なことは「弱者への思いやり」ということだ。(美崎)